

秋元波留夫・上田 敏

精神を病むということ

(A 5 判 326 頁 4,635 円 (税込) 1990 年 医学書院 刊)

木村 敏

(京都大学医学部整形外科)

本書は、わが国の精神医学の最長老である秋元波留夫氏に、リハビリテーション医学の権威である上田敏氏が、精神医学の過去・現在・未来について質問し、秋元氏がこれに答えるという形式で書かれている。対談であるから非常に読みやすく、しかも要所要所で秋元氏が後から丹念に筆を入れて、学問的にも正確な内容が述べられている。

すでに 4 半世紀前に東大教授を定年退官された著者の秋元氏が、その後も臨床の第一線に立って、精神医療、特にリハビリテーション精神医学の向上に努められただけでなく、なによりもまず、精神を病む患者とその家族に対する社会的偏見の除去に向けて現在もお余人をもって代えがたい貢献を続けておられることに、私は日頃から深い感銘を受けている。この感銘は、本書を一読してますます強いものとなった。医学者として

の最高の地位にあったこの著者が、80 歳をはるかに過ぎた現在もなお持ち続けておられる精神病者の社会復帰へ向けてのこの若々しい情熱は、世界的に見ても決して多くの例をみないであろうところの、極めて貴重なものと言わなくてはならない。

本書では、まず「精神の病気」を見るいくつかの見方が紹介され、これらの見方が西洋と日本の歴史の中でどのように変化し、現在我々が親しんでいる「精神医学」の体系にまとめられていったかが述べられている。次に、著者自身が若いときにみずから調査にあたったアイヌの「イム」を例にとって精神障害と文化との関係が語られ、同じく著者が先駆者となった「失行症」や「てんかん」の研究から、「脳の病気としての精神疾患」に話題が及ぶ。次に精神科薬物療法についての淵源と最新の知見が紹介された後、著者が特に情熱を

傾けている精神科リハビリテーションの歴史と現状、ことにわが国でリハビリテーションが立ち遅れている状況が語られ、最後にこの深刻な欠陥を是正するための今後に向けての提言がなされている。

正直に言って、著者の持つ生物学的な精神病観と、私の人間学的な見方とは基本的に異なっているし、また著者の語る精神医学の歴史は、当然のことながらもっばら著者自身の育った東大精神医学教室が、欧米からわが国に受け入れてきた精神医学の歴史に限られている。しかし、この立場が現在の世界の精神医学の主流を代表していることは間違いないし、これが精神疾患の一面を理解する上で不可欠の見方であることにも疑問の余地はない。また、著者がもっとも力点を置いている精神病者の社会活動の促進という一点に関しては、言うまでもないことながら立場によって観点の相違など生ずるはずはないだろう。卓越した精神医学者としての、そして行動的な精神科医としての秋元氏の見事な生きざまに対して、深い敬意と惜しめないエールを贈るとともに、本書が一人でも多くの人に読まれることを切望してやまない。